様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　22 年　6 月　15 日現在

研究種目：　基盤研究（A）
研究期間：　2006～2008
課題番号：　18202023
研究課題名（和文）　ブリテン諸島の歴史の総合的再構築

研究課題名（英文）　Comprehensive reconstruction of the history of the British Isles

研究代表者
近藤 和彦（Kondo Kazuhiko）
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号　90011387

研究成果の概要：　本研究の成果は、ブリテン諸島（現イギリス・アイルランド）地域の歴史をヨーロッパおよび大西洋の関係のなかでとらえなおし、古代から今日までの期間について、自然環境から民族、宗教、秩序のなりたちまで含めて考察し、そこに政治社会をなした人々のアイデンティティが複合的で、かつ歴史的に変化した点に注目することによって、旧来のホウィグ史観・イングランド中心主義を一新した、総合的なブリテン諸島通史にむけて確かな礎を構築したことにある。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	10,200,000	3,060,000	13,260,000
2007 年度	9,500,000	2,850,000	12,350,000
2008 年度	7,300,000	2,190,000	9,490,000
年度			
年度			
総　計	27,000,000	8,100,000	35,100,000

研究分野：　人文学
科研費の分科・細目：　史学・西洋史
キーワード：ヨーロッパ　複合国家　連合王国　大西洋　植民地　議会　アイデンティティ

１．研究開始当初の背景

イギリス史が特別の意味をもったのは、福沢諭吉以降の近代日本の知識人には限らない。ギゾー、リストやマルクス、ヴェーバーなど、文明と歴史を真剣に考えた 19 世紀以来の各国の知識人の多くは、英国を準拠枠として表象していた。他国に比してすぐれた、ないしは世界史の先頭をゆくブリテンを模範とし、その経験を教訓として学ぼうとするか、あるいは世界資本主義の根本矛盾が現れているとしてそれを解析しようとしたのである。

こうした情況はしかし、20 世紀半ばからゆっくり転変する。進歩主義・定向進化論の崩壊、脱植民地主義とポストモダニズムとともに、近代的要素の起源と足跡を明らかにし賞揚するといった立場は疑問視され、西欧とくにイングランドの中心性は自明のものでなくなった。社会史へ、地域史へ、複合国家・多文化研究へ、といった動きは、歴史学にお

けるだけでなく現代の知の変貌のあらわれといってよい。イギリス・英国・イングランド・ブリテン・諸島などの概念の区別と連関について批判的に取りくむ研究が 1970 年代から英米などで蓄積されている。そうした各地域とヨーロッパ、大西洋圏など海外とのつながりもまた、歴史的由来とともに再認識されている。

こうした歴史観・文明観における大きな動きに加えて、歴史学の営みもまた、史料革命というべき局面をむかえ、サイエンスとして高度化した。その一つの現れが「修正主義」とよばれる新展開である。これは歴史観・文明観の転変とも密接不可分の現象である。しかし、実証的に精緻化された今日の専門的歴史学は、大きな歴史の流れや時代のとらえ方を呈示することなく、些末主義に陥っているかにもみえる。

２．研究の目的

本研究は、地理的にブリテン諸島（British Isles）とよばれる島嶼の歴史をヨーロッパおよび大西洋の歴史のなかで位置づけなおし、古代から今日まで、環境、民族、言語、宗教、そして秩序のなりたちまで含めて大きく考察すること、現今の研究水準によって一新した、総合的なブリテン諸島史を構築することを目的とし、各分野においてフロンティアにたつ研究者の分業・協力をめざす。代表者と分担者は勤務校・出身大学を異にするが、すでにさまざまの機会に交流と討論の場をもち、継承されてきた歴史像・研究史を革新し再構築する必要、国際的協力によって研究・教育における彼我の隔絶を埋める必要について、意気投合している。海外研究者との密接な連携も約束されている。「イギリス史」の革新が直近の課題であるが、本研究によって西洋史だけでなく、歴史学における複合国家、多文化、広域システムの研究に貢献するであろう。

３．研究の方法

この研究課題のための準備企画はいくつかあった。まず代表者の専門である「長い 18 世紀」については、近藤和彦（編著）『長い 18 世紀のイギリス ― その政治社会』（山川出版社、2002）があり、８名の研究者がグレートブリテン、アイルランド、北米植民地における政治社会を分析し、フランスのアンシァン=レジームとの対比をおこなった。

また 2003 年９月には「イギリス史における国家と帝国」という共通論題をかかげて京都にて第４回日英歴史家会議（AJC）を開催し、海外から研究者９名を招聘し、３日間の濃密な討議を重ね、顕著な実をあげた。その記録は、Kazuhiko Kondo (ed.), *State and empire in British history: proceedings of the 4th Anglo-Japanese conference of historians* (Tokyo, 2003) という報告・討論集として刊行されている。こうした企画から継承する学問的資産は少なくない。

本研究は従来の「イギリス史研究」の隘路を突破する意味をもつので、その遂行のためには、まずこれまでの研究蓄積について周到な整理と分析が必要であった。とりわけ 1970 年代後半から蓄積されてきた「修正主義」の方法と成果についての吟味は欠かすことができない。この課題のために、関連する刊行史料・研究文献・データベースの収集と批判的分析をすすめ、また研究会をくりかえし、英語圏への研究旅行を積極的におこない、内外の協力研究者との討論・セミナーなどを精力的に実現した。

海外共同研究者としては、ケインブリッジ大学教授=王立歴史学協会会長ドーントン（Martin Daunton）、ケインブリッジ大学教授=英国学士院副会長モリル（John Morrill）、ロンドン大学教授=歴史学研究所所長ベイツ（David Bates）の３人をはじめとする一線の歴史家から、緊密な協力を仰いだ（いずれも当時のポスト）。代表者は王立歴史学協会のフェロー、歴史学研究所のフレンドである。他の研究者もまた、専門に応じて英米を中心とする海外研究者と交流し、email を交わし、王立歴史学協会、歴史学研究所などの施設と資産を利用してきた。

４．研究成果

所期のとおり、従来の「イギリス史研究」の隘路を突破するために、研究蓄積について批判的なサーヴェイを加え、とりわけ「修正主義」の方法と成果については十分に慎重に吟味した。物品費と国内旅費を充てて、関連する刊行史料・研究文献・データベースの点検と批判的分析をすすめ、小セミナーおよび合宿研究会をくりかえした。国際交流・国際発信にも積極的に取りくんだ。海外旅費は、連合王国・ヨーロッパ・北米・アジアにおける国際会議への参加および調査研究旅行のために支出された。史料調査ばかりでなく各専門研究者との学術情報および意見の交換は首尾よく進展し、学会での発表、専門誌への論文の寄稿などについても、別に列挙するとおりの成果があった。

合宿研究会の主要な目的は、ブリテン諸島の歴史の総合的再構築の具体的な所産として共著を公刊するための密接な討議であった。これをふまえて研究組織メンバー全員で共著『イギリス史研究入門』（山川出版社、2010 年刊行予定）の執筆に専念し、鋭意、編集・校正中である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　10 件）

1. Kazuhiko Kondo, 'Lost in translation? Documents relating to the disturbances at Manchester 1715', *Manchester Region History Review*, 19 (2008), pp.81-94. 査読有
2. Sugiko Nishikawa,'Die Fronten im Blick: Daniel Ernst Jablonski und die englische Unterstutzung kontinentaler Protestant- en', *Daniel Ernst Jablonski: Religion, Wissenschaft und Politik um 1700*, Joachim Bahlcke & Werner Korthaase, eds, Wiesbaden (2008), pp.151-168, 査読無
3. 西沢保「マーシャルにおける経済学と倫理」『経済研究』59 巻 1 号（2008），pp. 46−58 査読有
4. 小泉徹「井内太郎『16 世紀イングランド行財政史研究』書評」『史学雑誌』117 編 3 号（2008），pp. 115−124. 査読有
5. 近藤和彦「チャリティとは慈善か―公益団体のイギリス史」『年報都市史研究』15 号（2007），pp. 33−41. 査読有
6. Kazuhiko Kondo, 'The Church and politics in 'disaffected' Manchester 1718-31,' *Historical Research*, 80 (2007), pp. 100-123. 査読有
7. 近藤和彦 「2006 年の歴史学界―回顧と展望 総説」『史学雑誌』116 編 5 号（2007），pp. 1−5. 査読有
8. 坂下史「1830 年代ロンドンの社会と統治：郊外教区・メトロポリス・中央政府」『別冊都市史研究　江戸とロンドン』（2007），pp. 65−77. 査読有
9. 近藤和彦「2005 年の歴史学界―回顧と展望 歴史理論」『史学雑誌』115 編 5 号（2006），pp. 1−5. 査読有
10. Shunsuke Katsuta, ‘The militia interchange between Great Britain and Ire- land’, *Migration and identity in British history: proceedings of the 5th Anglo-Japanese conference of historians*, (2006), pp.160-171. 査読有

〔学会発表〕（計　4 件）

1. 秋田茂　The Asian Association of World History 世界大会組織および司会　2009 年 5 月 29 日～31 日　於大阪大学
2. 近藤和彦　'Ukiyoe and the Westminster Bridge: cultural exchanges before "Japonisme"' Korean Society for British History Conference. 2008 年 11 月 13 日　於韓国・光州大学
3. 近藤和彦「18 世紀のマンチェスタ：近世から近代へ」日本西洋史学会大会公開講演、2008 年 5 月 10 日、於島根県文化会館
4. 近藤和彦「日本における西洋史学と近代の理解」 Korean Society for Western History Conference.　2007 年 7 月 5 日　於韓国・ソウル大学

〔図書〕（計　15 件）

1. 近藤和彦（編著）『イギリス史研究入門』（山川出版社, 2010）　400p.（研究組織全員による共著）
2. 勝田俊輔『真夜中の立法者キャプテン・ロック』（山川出版社, 2009）304p.
3. 坂下史（共著）『近代イギリスと公共圏』「地域社会における公共圏」（昭和堂, 2009）pp.131-159
4. 金澤周作『チャリティとイギリス近代』（京都大学学術出版会, 2008）434p.
5. 秋田茂・桃木至朗（編著）『歴史学のフロンティア：地域から問い直す国民国家史観』（大阪大学出版会, 2008）　265p.
6. 鶴島博和・春田直紀（編著）『日英中世史料論』（日本経済評論社, 2008）　397p.
7. 阪本浩・鶴島博和・小野善彦（編著）『ソシアビリテの歴史的諸相：古典古代と前近代ヨーロッパ』（南窓社, 2008）　248p.
8. 近藤和彦（編著）『歴史的ヨーロッパの政治社会』（山川出版社, 2008）　606p.
9. 西川杉子（共著）『歴史的ヨーロッパの政治社会』（同上）「プロテスタント国際主義を生きる」pp.229-266
10. 青木康（共著）『歴史的ヨーロッパの政治社会』（同上）「18 世紀イギリス地方都市の下院議員選挙」pp.348-377
11. 富田理恵（共著）『歴史的ヨーロッパの政治社会』（同上）「17 世紀スコットランドにおける革命と政治社会」pp.111-152
12. Shigeru Akita (ed.), *Creating global history from Asian perspectives: proceedings of global history seminars and workshops* (Osaka University, 2007), 136 p.
13. 近藤和彦・伊藤毅（編著）『別冊都市史研究　江戸とロンドン』2007 年 12 月、242p.
14. 勝田俊輔（共著）『信仰と他者』「アイルランドにおける宗派間の融和と対立」（東京大学出版会，2006）pp.183-222.
15. David Bates & Kazuhiko Kondo (eds), *Migration and identity in British history: proceedings of the 5th Anglo-Japanese conference of historians* (Tokyo, 2006), 292p.

〔その他〕

国際的学術発信

1. *International Bibliography of Historical Sciences, LXXIII: publications of 2004* (K. G. Saur: Munich, 2008): Advisory board & contributing editor
2. *International Bibliography of Historical Sciences, LXXII: publications of 2003* (K. G. Saur: Munich, 2007): Advisory board &

contributing editor
3. *International Bibliography of Historical Sciences, LXXI: publications of 2002* (K. G. Saur: Munich, 2006): Advisory board & contributing editor
4. ホームページ URL http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~kondo/

６．研究組織

(1)研究代表者
近藤 和彦（Kondo Kazuhiko）
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
90011387

(2)研究分担者
西川 杉子（Nishikawa Sugiko）
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
80324888

(3)連携研究者
秋田　茂（Akita Shigeru）
大阪大学・大学院文学研究科・教授
10175789
青木　康（Aoki Yasushi）
立教大学・文学部・教授
10121451
金澤 周作（Kanazawa　Shusaku）
京都大学・大学院文学研究科・准教授
70337757
勝田 俊輔（Katsuta Shunsuke）
岐阜大学・教育学部・准教授
00313180
小泉　徹（Koizumi Toru）
聖心女子大学・文学部・教授
50225348
西沢　保（Nishizawa Tamotsu）
一橋大学・経済学研究所・教授
10164550
坂下　史（Sakashita Chikashi）
東京女子大学・文理学部・准教授
90326132
鶴島 博和（Tsurushima Hirokazu）
熊本大学・教育学部・教授
20188642
富田 理恵（Tomita Rie）
東海学院大学・人間関係学部・准教授
80322543